PABLO LIVE
DUKE ELLINGTON IN THE UNCOMMON MARKET
(デューク・エリントン・イン・ヨーロッパ)
COMPACT disc DIGITAL AUDIO
STEREO
J33J-20125
Made in Japan
POLYDOR K.K.
1. BULA/2. SILK LACE/3. ASPHALT JUNGLE
4. STAR-CROSSED LOVERS/5. IN A SENTIMENTAL MOOD
6. E.S.P. (EXTRA SENSORY PERCEPTION)/7. PARIS BLUES
8. THE SHEPHERD (First Concept)
9. THE SHEPHERD (Second Concept)
10. KINDA DUKISH
DUKE ELLINGTON
All compositions by Duke Ellington

DUKE ELLINGTON
in the Uncommon Market
PABLO
Stockholm
St. Paul-de-Vence
Pastacifita
J33J 20125

J33J 20125

# デューク・エリントン・イン・ヨーロッパ

## DUKE ELLINGTON IN THE UNCOMMON MARKET/DUKE ELLINGTON

1. ブラ(アフロ・ボサ)
   BULA
2. 絹のレース
   SILK LACE
3. アスファルト・ジャングル
   ASPHALT JUNGLE
4. 星回りの悪い恋人たち
   (「シェイクスピア組曲」より)
   STAR-CROSSED LOVERS
5. イン・ア・センティメンタル・ムード
   IN A SENTIMENTAL MOOD
6. E.S.P.
   E.S.P.(EXTRA SENSORY PERSEPTION)
7. パリ・ブルース
   PARIS BLUES
8. 牧師(ファースト・コンセプト)
   THE SHEPHERD(First Concept)
9. 牧師(セカンド・コンセプト)
   THE SHEPHERD(Second Concept)
10. カインダ・デューキッシュ
    KINDA DUKISH

(All Compositions by Duke Ellington)

### パーソネル

●デューク・エリントン・オーケストラ

クーティ・ウィリアムズ、キャット・アンダーソン、ロイ・バロウズ、レイ・ナンス(トランペット);
ローレンス・ブラウン、バスター・クーパー、チャック・コナーズ(トロンボーン); ジョニー・ホッジス、
ラッセル・プロコープ、ジミー・ハミルトン、ポール・ゴンザルヴェス、ハリー・カーネイ(リーズ);
デューク・エリントン(ピアノ); アーニー・シェパード(ベース); サム・ウッドヤード(ドラムス)

●イタリア、スウェーデンで録音

8, 9, 10.
デューク・エリントン(ピアノ)、ジョン・ラム(ベース)、サム・ウッドヤード(ドラムス)

●フランスで録音

◎おことわり

当CDのレーベルに「STEREO」と表記してありますが**1～7までモノラル、8～10がステレオです。**

**デューク・エリントン楽団の1960年代前半のヨーロッパ公演の貴重な演奏を収めた新アルバム**

アメリカの生んだ世界的なジャズ・ミュージシャンは沢山いるが、オーケストラ・リーダー、作編曲家、ピアニストとしてのデューク・エリントンは、ジャズを音楽芸術として確立した最も偉大なアーティストといえるだろう。1899年に生れ74年に没するまで、彼は常に卓抜したビッグ・バンドを率い、無数の名曲名演奏を残した。何時の時代のバンドが最も優れていたか、と断定出来ない程、いつも絶えざる創造性を発揮したのが、彼の創作曲と彼の率いるバンドの演奏であった。

1960年代前半の数年間、デュークのバンドはノーマン・グランツの企画で、5回に亘るヨーロッパ・ツアーを実行し、その間64年に日本へも待望の初来演を遂げている。本アルバムは、グランツの指摘によれば、イタリーとスウェーデンにおけるビッグ・バンド、フランスにおけるピアノ・トリオのコンサート録音を1枚のLPに収めたものである。年代的には、裏面記載のバンド・パーソネルと、演奏曲目から推して、恐らく1962年後半から63年にかけてのビッグ・バンド、66年のピアノ・トリオの演奏であろうと思われる。

この時期には、デュークが、テレビや映画の音楽に意慾を示し、又ヨーロッパを始めとする海外ツアーを殆ど例年実行して、その印象を作品化するなど、創造的活動が目立って増大している。一般ジャズ界が、ハード・バップを中心に目ざましい円熟度を示したのに呼応して、デュークのバンドも新鮮なサウンドと創作を積極的に推進した。バンド・メンバーも、各セクション共に、ベテランのエリントニアンを中核とする不動の陣容を誇り、今日では想像も出来ないような豪華なオールスター奏者を擁した。エリントン楽団の未発表のライヴ録音は、最近続々と発表されているが、多くは50年代までに止まっているので、ノーマン・グランツの手によるこの60年代の新アルバムは、そのサウンド効果の良さと相俟って、貴重な新しい資料となることであろう。

**演奏曲目について**

**1. ブラ（アフロ・ボサ）**

デューク・エリントン自身が、曲のタイトルをBulaと紹介して演奏が始まる。ブラスがエキゾチックな響きを奏し、ボレロのようなリズムが反覆される。短いasのソロ（ジョニー・ホッジス）をはさんで、全篇殆どブラスとサックスのアンサンブルが、神秘的な感じの色模様をさまざまに画いていく。後半ハイ・ノートのtpがクライマックスを作る。この曲は、エリントンが1963年に録音したRepriseアルバムAfro Bossaの中に収録されたタイトル曲“Afro Bossa”と同曲であり、“Gutbucket Bolero”とも呼ばれる。明らかにボサ・ノヴァではなく、ボレロに近い。

**2. 絹のレース**

次の曲は、エリントンがCaline又はSilk Laceと紹介する。ジミー・ハミルトンのクラリネット・ソロのショー・ケースともいうべく、ジミーのモダンな感覚のトーンが今日きいても新鮮である。この曲も、上記のAfro Bossaアルバムの中に収録されており、アレンジは大体同じスコアを用いているが、サム・ウッドヤードのドラミングが少し違うようだ。

**3. アスファルト・ジャングル**

1960年～61年に1年間つづいたTVシリーズのテーマ曲としてエリントンが書いたもので、60年6月に、Asphalt Jungle Theme（Ⅰ）（Ⅱ）として録音されたレコードがシングル盤で発売され、翌61年7月に、Asphalt Jungle Twistとして同趣の吹込がなされている。アップ・テンポに乗ったリード・セクションのソリが、エリントン楽団らしい独特の音色と粘りあるリズミックなフレーズを展開している。特にPソロのあとのリードの見事なソリは圧巻である。何しろ、ホッジス＝プロコープ＝ハミルトン＝ゴンザルヴェス＝カーネイの5人の黄金のサックス・セクションのかもし出す雰囲気は、それ自体一つの芸術品といえるだろう。ブラスのハイ・ノートのスクリーミングなクライマックスも、クーティ＝キャット＝ナンスと揃った至宝のトランペット陣ならではであろう。

**4. 星回りの悪い恋人たち**

**（「シェイクスピア」組曲より）**

エリントンが1957年に作曲したシェイクスピア組曲 Such Sweet Thunder の中に含まれた1曲で、題名の「星廻りの悪い不運な恋人たち」という意味は、「ロミオとジュリエット」の2人の主人公と指している。

エリントンが、ジョニー・ホッジスを紹介して演奏が始まる。彼はジュリエットの役をジョニー・ホッジスのasに、ロミオの役をポール・ゴンザルヴェスのtsに割りあててこの曲を書いたが、実際の演奏では殆どホッジスの一人舞台のソロ・プレイになっている。ホッジスの得意のグリッサンドを利かしたクリーミーなトーンが、美しい

抒情詩を描き出す。

**5. イン・ア・センチメンタル・ムード**

エリントンが1935年に作曲して以来、不断にリクウェストされ続けている美しいバラードの傑作で、時代によってバンドのいろいろのソロイストがフィーチュアされてきたが、この時期にはいつもtsのポール・ゴンザルヴェスが起用された。ハードなプレイで有名な彼が、珍しい位の抒情性を堪えたプレイをきかせる。尚エリントンが62年9月に共演してレコーディングしたジョン・コルトレーンも、この曲を吹込んでいる。

**6. E.S.P.**

Extra Sensory Perceptionの略意だが、tsのポール・ゴンザルヴェスの得意とするアップ・テンポのハード・ブローイングのショー・ケース曲である。スタンリー・ダンスによると、この曲にも本来のタイトルが別にあるようだが、有名なDiminuendo & Crescendo in Blueにも似ているようだが、既発のLPアルバムに収録されている曲かどうかは不明である。兎に角急速調のゴンザルヴェスの流れるような力強いプレイがききものである。

**7. パリ・ブルース**

Paris Bluesという曲は、1961年の同名映画の主題曲として、エリントンが書いたもの。ポール・ニューマン、シドニー・ポアチエに、ルイ・アームストロングも出演しエリントンが音楽を担当して評判となり、そのサウンドトラックがUAから発売され、アカデミー賞の候補にもなった。このアルバムのライナー・ノーツを書いたスタンリー・ダンスは、「Paris Bluesは1960年の同名の映画のために書かれた曲で、ここではオリジナルとは全く異る処理がされている…」と記している。しかしこれは、どうきいてもParis Bluesではない。エリントンは、1962年1月に、パリに因んだシャンソンやオリジナル曲を13曲録音して、Midnight in Parisという LPアルバムを制作している。この中には、Mademoiselle de Parisとか、Under Paris Sky, Parlez-moi d' amourなどのなつかしいシャンソン曲や、丁度エリントンが前年映画のために作ったParis Bluesなどが収録されている。その中に、エリントン自作のGuitar Amourという曲があって、レイ・ナンスのヴァイオリン・ソロがフィーチュアされているが、よくきくと、本アルバムのこの曲と同じである。エリントン楽団のディスコグラフィーによると、この頃彼は多くのコンサートで、このGuitar Amourをナンスのヴァイオリン・



ソロ用の曲として演奏している。この演奏は、イントロに、ベースとマラカス類の打楽器が鳴り出すので、エリントンのおしゃべりの声がよく聞きとれないが、打楽器を臨時に扱っているバンド・メンバーを紹介したあと、「レイ・ナンスのヴァイオリンでGuitar Amour」と曲名を名指しているようにきこえる。まだPablo本社に照会確認した記ではないが、先づ間違いないと思うので、曲名を訂正しておきたい。

レイ・ナンスは、tpとcornetの名手であるが、同時にヴァイオリンの奏者としても独特の音色と風格を持ち、エリントン楽団の多くの曲でフィーチュアされている。ここでは、アドリブ・プレイのあと、ピッチカット奏法まで披露している。

**8. 牧師(ファースト・コンセプト)**

**9. 牧師(セカンド・コンセプト)**

**10. カインダ・デューキッシュ**

以上の3曲は、エリントン楽団のフル・メンバーによるものではなく、エリントンのピアノに、ドラムス、ベースのトリオの演奏である。原盤のノーマン・グランツの説明によると、グランツがエリントン楽団と歌手エラ・フィッツジェラルドを連れて、フランスのジュアン・レ・パンで行われたフェスティバルに出演してその実況を映画にとった際、或日デュークとサム・ウッドヤード(dr)とジョン・ラム(b)の3人のトリオをマーグ画廊(Fondation Maeght)に滞同して、スペイン出身の有名な画家ホアン・ミロ(Joan Miro)とデュークを主題にした短篇映画をとった。その時に、デュークのピアノ・トリオが演奏したのが、この3曲であった、という。グランツは、その年月を記載していないが、デュークのディスコグラフィーによれば、上記のフェスティバルは、1966年7月27～28日に行われ、Verveレーベルから、Ella & Duke at the Côte D'Azurと題する2枚組アルバムが発売されている。この時の楽団のリズムメンは、上記のウッドヤードドラムとなっているから、グランツの説明に符合すると思われる。

【1986.8.28記　瀬川昌久】

●この解説はレコードの解説書から転載しました。

PABLO パブロライヴレコード
発売元／ポリドール株式会社

●権利者の許諾なく賃貸業に使用することを禁じます。
また無断で録音することは法律で禁じられています。

# DUKE ELLINGTON

## *in the Uncommon Market*

SILK LACE
ASPHALT JUNGLE
STAR-CROSSED LOVERS
IN A SENTIMENTAL MOOD
E.S.P. (EXTRA SENSORY PERCEPTION)
PARIS BLUES
THE SHEPHERD (First Concept)
THE SHEPHERD (Second Concept)
KINDA DUKISH

PERSONNEL:
Trumpets: Cootie Williams
Cat Anderson
Roy Burrowes
Ray Nance
Trombones: Lawrence Brown
Buster Cooper
Chuch Connors
Reeds: Johnny Hodges
Russell Procope
Jimmy Hamilton
Paul Gonsalves
Harry Carney
Bass: Ernie Shepard, John Lamb
Drums: Sam Woodyard
Piano: Duke Ellington

Producer's Notes:

By the very nature of things artists, especially in music, rarely if ever give the same performance twice, much less thrice or more, and this is particularly true in jazz, even in big band jazz with written arrangements. The great soloist playing the same song the tenth or hundredth time tries always to find something fresh to say, however subtly. The stimulus from the public, the sound of the concert hall, and the general vibes of the hotel, city, country (especially countries where the natives are friendly) all help to define what went down that night.

Duke's band was a paradox largely, I suggest, because he himself was a paradox. He was the rare leader (in fact the only one that comes to mind) who composed more than 90% of the music played by his band (with and without Billy Strayhorn). The band had, as a result, the largest library of any orchestra, yet nevertheless presented virtually the same program on all one-nighters on any given tour. During the 1950's and 1960's I presented him in countless concerts in Europe and the United States. Inevitably, although there were many new works rehearsed, the music played on the gig always had at least 50% vintage songs such as "Rockin' In Rhythm," "Satin Doll," "The Creole Love Call Medley," and so on. It was not that kind of programming that bothered me, but that on a European tour of 25 to 30 cities it was almost precisely the same program every night. It was the incredible solo talent the band was blessed with — Hodges, Gonsalves,



Cootie, et al — that kept the music fresh.

In this album I elected hot to have an album from a single concert; instead I used the best of several taken largely from Italy, Sweden, and France. Although the big band was roaring on the Swedish and Italian concerts, you may find you prefer the relatively quiet Trio set I recorded in St. Paul de Vence in the South of France.

I filmed the band with Ella Fitzgerald at the Festival at Juan Les Pins. One afternoon I took Duke, drummer Sam Woodyard, and bassist John Lamb to the Fondation Maeght, which is, without doubt, physically one of the most beautiful museums in the world. I made a short film featuring the great Spanish painter Joan Miro and Duke. I prevailed upon Duke to play two or three numbers for Miro's benefit, who was an admitted jazz fan, especially of Duke Ellington. The first number "The Shepherd" pleased Duke so much that he did a second version extending it by almost a third. I found the two takes so charming that I decided to include them both. He also played "Kinda Dukish."

I pleaded with Ellington to repeat the Trio set with the same tunes on the evening concert. He agreed it was a good idea, but, typically, never played them again on the rest of that tour.

Norman Granz

Long before it had a Common Market, and even before it was possible to fly swiftly from city to city, Europe was an uncommon market for jazz, with customers hungry for commodity often in short supply. This market's potential had been surveyed in the '20s by enterprising men like Sidney Bechet, Tommy Ladnier and Claude Hopkins, who variously demonstrated their musical prowess in London, Paris, Berlin and Moscow. They were, in effect, avant-garde scouts, the precursors of the vanguard which entered on the scene in strength during the '30s, when Louis Armstrong, Fats Waller, Duke Ellington, Coleman Hawkins, Benny Carter, Bill Coleman, Dicky Wells and Jimmie Lunceford firmly established the music on an ever-expanding market.

It was not a music taken for granted as it was in its own country, where it was to be heard in abundance on the radio and in person. Until the outbreak of WWII, the chief means of propagation in Europe were records in the hands of fanatical enthusiasts who viewed jazz as a cause to be fought for with passion. This feeling was only intensified by the six-year hiatus of war. Repression and restriction stimulated demand, and once Hitler had been crushed jazz flourished on an unprecedented scale.

As the battered economies of nations were reconstructed, and the efficiency of airlines increased, the pace quickened. One-nighter tours became possible comparable to those in the U.S., although in Europe the musicians might find themselves each night in a different country with a different language and different money. Pioneering impresario Norman Granz, as he organized major tours of the greatest jazz artists



had a larger vision than most of those engaged in the music business, because he saw the importance of continuing to record the concerts he presented, as he had had the foresight to do with Jazz at the Philharmonic in the '40s.

One of the uncommon artists he took repeatedly to his uncommon market was Duke Ellington, and this album consists of selections from Ellington concerts during the '60s, when his band played in England, Germany, Belgium, Italy, France and Scandinavia among other places.

*Afro-Bossa*, which Ellington more often than not introduced as *Bula*, is from what was probably the busiest year of his entire life, 1963. Ellington's awareness of what he publicly called "une nouvelle vague exotique" was reflected in music that had little to do with *bossa-nova*, but much to do with his own brand of exoticism. In more down-home language, he referred to *Bula* as "the gutbucket bolero," which is inelegant but not inexact. Right from the beginning, with its mysterious muted brass, this is an evocative and stirring performance that depends less on soloists than the ensemble, although Johnny Hodges's statements are close to perfection.

*Silk Lace*, originally entitled *Caline*, is a showcase for clarinetist Jimmy Hamilton, whose immaculate technique enables him to exploit its intricacies with seemingly effortless grace.

The *Asphalt Jungle* theme was written for a television series, and the music is notable for its climactic tension. Again, the ensemble has precedence over soloists, but the reed section, whose personnel went unchanged longer than any other in the history of jazz, has unusual

prominence. Sam Woodyard's well-recorded drums and commanding accents are especially striking.

*Star-Crossed Lovers* is the Romeo and Juliet episode from Ellington's Shakespearean Suite, and it is given the kind of poised but emotionally moving treatment for which Johnny Hodges had no peer.

*In a Sentimental Mood,* written in 1935 and one of Ellington's most durable ballads, is here entrusted to Paul Gonsalves with a beauty of tone, who well knew how to bring out its tenderly romantic qualities.

*E.S.P. (Extra Sensory Perception)* is another of Ellington's alternative titles, in this case for one of those up-tempo vehicles which Gonsalves was invariably called upon to excite audiences. Judging by the cries from the piano, the maestro was also excited by his tenor saxophonist's surpassing virtuosity.

*Paris Blues* was written for the movie of that name in 1960 and is here given an entirely different treatment to the original. Ray Nance, the protagonist, playing violin with remarkable fervor and conviction over an insistent rhythmic background where the piano player excels.

On the same side as *Paris Blues* are three Trio sides recorded at the Fondation Maeght about which Norman Granz more fully writes in his comments.

Stanely Dance

(*Reprint of the original album liner notes.)



コンパクト・ディスク・デジタル・オーディオ・システム

小型で使い易い再生装置によって、最高のサウンドをお届けします。
この画期的なコンパクト・ディスクの実現は、レーザー光線とデジタル再生の結びつきによってもたらされました。
最高の音質を得る為に、コンパクト・ディスクの保管、取り扱いは、今までのレコードと同様、充分に注意して下さい。
常にディスクのふちを持って扱い、使用後は直ちにケースに入れて下さい。特別な手入れは必要ありません。
指紋、ほこり、汚れ等は、やわらかい、乾いた布でディスクの中心からふちに向って、まっすぐふいて下さい。
有機溶剤（シンナー等）や従来のスプレー式クリーナー等は使用しないようご注意下さい。
コンパクト・ディスクの取り扱いは、特別むづかしいものではありませんが、以上のようなことを守って下されば、音楽を聴く喜びを、生涯あなたにもたらしてくれるでしょう。

# DUKE ELLINGTON

## in the Uncommon Market

**BULA**
**SILK LACE**
**ASPHALT JUNGLE**
**STAR-CROSSED LOVERS**
**IN A SENTIMENTAL MOOD**
**E.S.P. (EXTRA SENSORY PERCEPTION)**
**PARIS BLUES**
**THE SHEPHERD (First Concept)**
**THE SHEPHER (Second Concept)**
**KIND DUKISH**

PERSONNEL:
Trumpets: Cootie Williams
Cat Anderson
Roy Burrowes
Ray Nance
Trombones: Lawrence Brown
Buster Cooper
Chuck Connors
Reeds: Johnny Hodges
Russell Procope
Jimmy Hamilton
Paul Gonsalves
Harry Carney
Bass: Ernie Shepard
Drums: Sam Woodyard
Piano: Duke Ellington

Produced by: Norman Granz
Photos by: Norman Granz (cover) & Quitman Dennis (inside)
Layout & Design: Norman Granz & Sheldon Marks
General Observations
about Duke and specific
observations about the tunes: Stanley Dance

℗1986 Pablo Records, Inc.

Producer's Notes:

By the very nature of things artists, especially in music, rarely if ever give the same performance twice, much less thrice or more, and this is particularly true in jazz, even in big band jazz with written arrangements. The great soloist playing the same song the tenth or hundredth time tries always to find something fresh to say, however subtly. The stimulus from the public, the sound of the concert hall, and the general vibes of the hotel, city, country (especially countries where the natives are friendly) all help to define what went down that night.

Duke's band was a paradox largely, I suggest, because he himself was a paradox. He was the rare leader (in fact the only one that comes to mind) who composed more than 90% of the music played by his band (with and without Billy Strayhorn). The band had, as a result, the largest library of any orchestra, yet nevertheless presented virtually the same program on all one-nighters on any given tour. During the 1950's and 1960's I presented him in countless concerts in Europe and the United States. Inevitably, although there were many new works rehearsed, the music played on the gig always had at least 50% vintage songs such as "Rockin' In Rhythm," "Satin Doll," "The Creole Love Call Medley," and so on. It was not that kind of programming that bothered me, but that on a European tour of 25 to 30 cities it was almost precisely the same program every night. It was the incredible solo talent the band was blessed with—Hodges, Gonsalves, Cootie, et al—that kept the music fresh.

In this album I elected not to have an album from a single concert; instead I used the best of several taken largely from Italy, Sweden, and France. Although the big band was roaring on the Swedish and Italian concerts, you may find you prefer the relatively quiet Trio set I recorded in St. Paul de Vence in the South of France.

I filmed the band with Ella Fitzgerald at the Festival at Juan Les Pins. One afternoon I took Duke, drummer Sam Woodyard, and bassist John Lamb to the Fondation Maeght, which is, without doubt, physically one of the most beautiful museums in the world. I made a short film featuring the great Spanish painter Joan Miro and Duke. I prevailed upon Duke to play two or three numbers for Miro's benefit, who was an admitted jazz fan, especially of Duke Ellington. The first number "The Shepherd" pleased Duke so much that he did a second version extending it by almost a third. I found the two takes so charming that I decided to include them both. He also played "Kinda Dukish."

I pleaded with Ellington to repeat the Trio set with the same tunes on the evening concert. He agreed it was a good idea, but, typically, never played them again on the rest of that tour.

Norman Granz

J33J 20125

# DUKE ELLINGTON

## in the Uncommon Market

BULA
SILK LACE
ASPHALT JUNGLE
STAR-CROSSED LOVERS
IN A SENTIMENTAL MOOD
E.S.P. (EXTRA SENSORY PERCEPTION)
PARIS BLUES
THE SHEPHERD (First Concept)
THE SHEPHERD (Second Concept)
KINDA DUKISH

PERSONNEL:
Trumpets: Cootie Williams
Cat Anderson
Roy Burrowes
Ray Nance
Trombones: Lawrence Brown
Buster Cooper
Chuck Connors
Reeds: Johnny Hodges
Russell Procope
Jimmy Hamilton
Paul Gonsalves
Harry Carney
Bass: Ernie Shepard
Drums: Sam Woodyard
Piano: Duke Ellington

Produced by: Norman Granz
Photos by: Norman Granz (cover) & Quitman Dennis (inside)
Layout & Design: Norman Granz & Sheldon Marks

General Observations
about Duke and specific
observations about the tunes: Stanley Dance

℗ 1986 Pablo Records, Inc.

MANUFACTURED BY POLYDOR K.K., JAPAN KA 8611 ¥3,300 H·10·25
●権利者の許諾なく賃貸業に使用することを禁じます。また無断で録音することは法律で禁じられています。

J33J 20125
COMPACT disc DIGITAL AUDIO
MONAURAL
デューク・エリントン・イン・ヨーロッパ
T4988 005 00922 7
PABLO LIVE

J33J 20125
DUKE ELLINGTON IN THE UNCOMMON MARKET/DUKE ELLINGTON
PABLO LIVE